

センバツ紙面の戦後史

■新編集講座 ウェブ版 第48号 2016/3/15

毎日新聞社 技術本部長（元・大阪本社編集制作センター室長） 三宅 直人

春はセンバツから——第88回選抜高校野球大会（毎日新聞社、日本高校野球連盟主催）が20日、阪神甲子園球場で開幕します。戦後70年、毎日新聞でセンバツはどう扱われてきたか、10年ごとに振り返りました。短い記録だけだった「中等野球」時代から、最近のゆったりした見開き紙面まで、時代とともに扱いが変わってきたのが分かります。

■ 中等野球と東京裁判の時代

まずは70年前の1946（昭和21）年から、と言いたところですが、第二次大戦で中断していたセンバツが復活したのは、翌47（昭和22）年のことでした。右図①がその年の紙面です（東京本社版、以下同、※）。

※ 開幕日や決勝戦ではなく「普通の日」の紙面を見るため、大会中ごろの「第4日」を選びました（以下同）。

当時は用紙不足で新聞が全2ページの時代。センバツは2面の片隅に記録だけが載っています。見出しに「中等野球」とあるように、学制改革の以前でした。戦犯を裁いた東京裁判の記事に、時代を感じます。

60年前の56（昭和31）年の紙面が右図②です。全8ページに増えて、独立したスポーツ面が誕生。センバツは、球形のカットを添えた前文や見出し、写真が入り、現代の新聞に雰囲気近づいてきました。

同じ面のプロ野球を見ると、毎日をはじめ東映や高橋、国鉄など姿を消したチーム名が目に入ります。鉄道と映画会社が多いですね。

■ 高度成長とともに増ページ

50年前の66（昭和41）年は、高度経済成長のまっただ中。朝刊のページ数は16に増え、センバツの扱いは、写真も見出しも、10年前より大きくなりました＝右図③。ただプロ野球と「同居」するなど、必ずしも十分なスペースとまでは言えなかったようで、前日夕刊に掲載された第1試合については、記事の掲載を省いています。

そのプロ野球、「東映の新兵器、森安」が目にとまりました。後年、「黒い霧事件（八百長）」で永久追放された元選手です。

40年前の76（昭和51）年は横見出しも登場、さらに今風になりました＝右図④。見出しに出てくる崇徳が、この年の優勝校です。

ちなみに私は、この年に大学に進学。予告記事の載った「アリ対アントニオ猪木」（対戦は6月）を覚えています。京都から琵琶湖までサイクリングに出かけ、喫茶店か何かのテレビで見ました。



見開きに描く「瀬戸内野球」

30年前の86（昭和61）年はバブル前夜。私が東京本社 of 若手編集者だった頃です。センバツが見開きになりました＝右図⑤。現在の紙面の形は、ほぼこの時代に完成したようです。

左面の「あえなく洲本「瀬戸内野球」」という見出しにご注目を。洲本と言えば、兵庫県の淡路島。作詞家の故・阿久悠さんの母校です。阿久さんの自伝的小説で映画にもなった「瀬戸内少年野球団」に想を得た見出しでしょう（映画の故・夏目雅子さんはとてもすてきでした）。見開きでスペースに余裕が生まれ、こうしたプラスアルファの見出しも可能になりました。

もう一点。インニングの形が、試合により違っていています。第1試合は前日夕刊に結果が入っていて、大型インニングも掲載済みです。だから朝刊ではわざわざ小型に変えたのです。

一方、20年前、96（平成8）年の紙面では、第1試合（前日夕刊で結果掲載済み）も大型インニングが使われています＝右図⑥；この年と2016年は、私が当時勤務していた大阪本社版紙面を掲載。

スポーツ面の担当デスクだった私は、手間ひまをかけて見にくくする作業に疑問を感じ、朝刊でも大型インニングを掲載するよう変えたのでした。

進化する紙面扱い

最後に10年前、2006（平成18）年の紙面が右図⑦です。やはり見開き2ページです。

以前と比べ、選評とインニングの扱いが変わりました。前文の下に前日3試合のインニングと選評をまとめて掲載し、ここだけを見れば前日の概要が分かるようにしたのです。

一方で、各ゲームの中身を詳しく書いた解説のトップに「棒スコア」（勝敗と点数だけを1行にまとめた簡易型スコア）を掲載。一々前文と照合する手間を省きました＝右欄参照。

このように、紙面のボリュームだけでなく、扱いも年々進化しているわけです。

今年の開幕戦は20日プレーボール。どんなドラマが生まれるか、今から楽しみです。



⑤ 86/3/30 朝刊

あなたなら、どんな見出しをつけますか？

右面の見出し「甲府商 初回の逸機響く」「その裏 京都西が強襲、4点」は、負けた学校をメインにしている点が不自然のように見えます。これは、山梨県を発行エリアに持つ東京本社版ならではの判断であり、甲府の読者の視点から「ああ負けた」という気持ちを表したものです。京都を管内に持つ大阪本社版の見出しは、京都の立場から考えます。あなたが大阪本社版の編集者なら、どんな見出しにするでしょうか。



⑥ 96/3/30 朝刊（大阪）



⑦ 2006/3/27 朝刊（大阪）
私は同年4月1日に東京に転動。
決勝戦は東京で迎えました。

一長一短、悩ましく

インニングや選評の扱いは、以前は試合ごとに解説記事や写真と一緒に組む方式でした。試合ごとのまとまりを重視したのです。全試合のインニング・選評を前文にまとめる方式は、一覧性に優れた半面、同じ試合のインニングと読み物が分断され、読みにくい難点もあります。一長一短、悩ましいところです。

日本文理 4-3 高崎商